

表現意欲と能力を育てる作文指導の研究

深浦町立修道小学校 山前 之乃

要 約

価値観の多様化が進む現在、自分と違う立場の人を理解するとともに、自分の考えを正確に伝える力が必要になっている。つまり、相手を理解し、受け入れる心と自己を主張する能力の育成が課題となっている。

子どもたちとの出会いの日から日常的に、事実をとらえて日記を書かせたり、読み合わせたりする活動をすすめてきたので、書くことにあまり抵抗感がなくなってきた。自分を主張し、意欲的に書こうとする子どもたちではあるが、表現方法は幼稚で、読み手意識が足りない文章を書いていた。また、自己を出しすぎて他が見えなくなることも多かった。そこで、

- ・ことばを通して、相手の思いや考えを的確にとらえ、さらにそれを自分の思いや考えと比較し、自分を高めるための学びの対象にする
- ・表現することで、もの・こと・相手についてのとらえ方を確かにする。また、同時にそれを通して自己を明確にする

力をつけたいと考えた。

そのために、毎日の日記や国語科の授業内での書く活動はもちろんのこと、クラスの児童の作文を教材とし、それをもとに表現能力を高めるための授業をしたり、国語科以外の教科でも意図的に書く活動を取り入れたりしている。これらを継続的に行うことによって、ことばを通しての自己の主張や相手を理解する心、文章の内容や表現方法、書くことに対する意識がどのように変わったのだろうか。実践を基に述べる。

〔キーワード〕 小学校 国語科 作文 表現意欲 表現能力

I. はじめに

子どもたちが「書きたがらなくなった」「書けなくなった」「書かなくなった」と言われてから、ずいぶんたつようである。教育的様々な記事や職員室の会話でも、よく目にしたり耳にしたりする言葉である。

しかし、幸いなことに担任しているクラスの29名（男子8名、女子21名）は、「何かを書きたくてうずうずしている」「日記や短作文ならスラスラ書ける」「女子はひまさえあれば、交換日記や手紙を書いている」のである。アンケートでも、29名中27名は、書くことがとても好き、あるいはまあまあ好きと答えている。残りの2名は、1名が嫌い、もう1名がその時によると答えている。数値から見ても、全体的に書くことが好きなクラスと言えるであろう。

ただし、書くことが好きだという意欲だけでは読み手の心をつかみ、動かす作文にはならない。自分を見つめ、自分の心と向き合い、思いのままを素直に書くことができる子どもに育て

たい。また、友達と作文を読み合うことによって、相手の考えや気持ちが分かり、相手を思いやる心へとつなげていきたい。そのための教師の指導や支援はどうあればよいのだろうか。

私は、子どもたちにいつも、「生涯にわたって書き続ける人になってほしい。そして、書くことによって自分を高められる人になってほしい」と話している。この言葉と一緒に私の研究もスタートしたのである。

Ⅱ. 研究の目的

- 基礎づくり（書くことのベースとしての日記指導、書くことを必然とする場の設定、国語の授業を中心とした書く活動など）
- 授業づくり（作文の表現や内容のよさを見つけ、自分の作文に生かす授業、書いてみたくなるような題材の開発）
- 環境づくり（作文の読み聞かせ、言葉を大事にする学級経営、興味・関心を持てる活動の工夫など）

以上の三本柱が表現意欲と能力を育てるために有効であるか研究する。

Ⅲ. 研究の方法

- 表現意欲や能力を育てる指導法について研究する。
- 児童作文を教材とした作文の授業を開発・実践し、書くことに対する意識や表現能力の変容をとらえる。

Ⅳ. 研究の実際

作文学習は書くこと（表現行為）とともにある。だからまず、書くことを面倒くさがらず、意欲的に進んで書こうとする子どもを育てなければならない。

書く意欲がなくては、書く学習は始まらないのである。

（1）基礎づくり

日記指導（心のアルバム）・・・資料1－①、②

昨年度は個人で、今年度は班で毎日日記を書かせている。帰りの会の5～10分程度の時間なので、量的に長い短いというよりも、感じたことや思ったことを心のアルバムに書きためているという感じである。ほとんどの児童が喜んで書いている。

初めのうちは、あったことをあったとおりに時間の順序にしたがって書かせていた。また、自分の一日を振り返り、素直に鉛筆を走らせるように話した。自分の行動や思いが文字として表される喜びを体得できるため、長い文章を意欲を持ったまま書いてくるようになった。毎日の生活の中から、ある一つの出来事を選んで書くということは、子どもたちにとって意味があることである。しかし、題材のパターン化、量のわりに中心が足りない、しりつぽみで終わっているなど、問題点も出てきた。そこで視点を与えつつも、子どもたちの意欲をそがないように気をつけている。（資料1－①）

- ・一番書きたいことをおさえて書こう
- ・はじめ・なか・おわりのなかの部分^{なか}をくわしく書こう
- ・題を初めに書こう など

また、日記には励ましの言葉やコメントをつけて返している。子どもにとって大事なものは、だれかに読んでもらいたいという欲求ではないだろうか。だれかに読んでもらいたいから書くという表現の原点がここにあるような気がする。子どもが、教師の批評を喜んで読み、それによって、表現意欲を起こすようにするために、次のような方法が必要であると考え。

ア ていねいに読む

たんに文章の稚拙さを見つけたり、表記上の誤りなどに目を凝らしたりするのではなく、表現の中から、生きて活動している姿や、生活を読み取ることである。

イ コメントは、子どもを目の前にしている気持ちで書く

教師自身の思いや、その子どもの生活を見て評価する。子どもの次の表現につながる大事なことである。子どもは教師の一言を見て意欲を起こすということを信じている。

ウ コメントは、子どもと教師の信頼の絆である

子どもの文章から、その子どもの生活や思いや願いを見ずえることは、それぞれの個性を持つ子どもたちに近づくことであり、子どもを信じることになる。子どももまた、自分の表現するものへの教師の受け答えによって、教師を知ることになる。

これらを考えると、うっかりコメントを書くことができないような気もするが、子どもを大事にし、子どもの成長を心から願っていれば、難しいことではないように思う。子どもの文章をやさしく読み取って、自分の言葉で語りかけたい。(資料1—②)

一方、班日記は子どもたちの相互理解に大きな役割を果たし、お互いの考え方を学び合う大切なものとなっている。高学年ともなると、今まで以上に自分を分かってほしいという気持ちが強くなってくる。そして、自分の作文を友達にも読んでほしいという気持ちが育ってくる。そこに友達発見があり、友達理解が深まると、作文はますます楽しいものになってくるのである。最初の読み手である教師がいて、よき友達がいて、そして作文を読み合い、友達のよさを認め合う中で、表現意欲も育つのである。

②国語の授業を中心とした書く活動の目標例

国語の授業を中心とした書く活動の充実にも努めている。視写、聴写、吹き出し、書き込み、書き足し、書き替え、抜き書き、書きまとめ、図式化（絵、図、年表）、感想（初発、二次）、心情曲線、要約など、書く方法はたくさんある。そしてまた、書かせることによって期待できることもたくさんある。

- ア 主題に即して感想や意見を持つことができるようになる。
- イ 内容ごとに的確にまとめる力がつく。
- ウ 細かな表現に即して読み、情景や心情を生き生きと思い描くことができるようになる。
- エ 主題を明確にし、それを表現するために必要な事柄を選び出す力が高まる。
- オ 人間の生き方について幅広く考えることができるようになる。
- カ 自分の書いた文章を読み返して、自分の考えを足したり、補足したりする力が高まる。
- キ 読後の印象や質問を整理し、読み深めていくための構えをつくることができる。
- ク 要点を落とさずに論理的に物事をまとめる力がつく。
- ケ 書き手のものの見方、考え方、感じ方が分かってくる。
- コ 自分の生活や意見と比べながら考えるようになる。

クラスの児童の実態として、全般的に学習に対する意欲はあるが、発表力が劣り、文章を読み取る力や読み取ったことを文章化する力が弱い。そこで、これらの力をつけるためにもさまざまな書く活動を一単位時間の指導過程に位置づけている。書く活動を通して、書く力はもちろんのこと、考える力、発表する力も確実にについてきている。

(2)授業づくり

①書きたくなる題材の開発

百の理屈よりも、まず書くことである。教師は、子どもが自ら書く場を確保し、書くことを支援していかなければならない。何を題材として書くか、その題材への興味・関心が活動の内的契機となるだろう。

高学年であれば、

- ・エネルギー消費について
- ・サケの一生について
- ・コマーシャルについて思うこと

など、タイムリーな話題や子どもたちの生活と深く関わっているものについては、子どもの意識が切実なものであれば、題材的に難しくても子どもたちが自分の言葉で表現するのは可能だろう。

また、行事作文についても、ただ感想を書かせるのではなく、

- ・運動会の後に 「運動会を終えてあなたの何が変わったか」
- ・修学旅行の後に 「修学旅行を楽しむために一来年の6年生に贈るメッセージ」

などとして思いや考えを引き出すことは意味があることと思う。単なる行事の思い出作文ではなく、ほんの少しの新しさを加えることで、子どもたちの意欲はずいぶん違うものである。

②書き方の指導（書くための技術の習得）

書いていけば、技術はおのずからついてくるものだという考えもあるが、書くことを効率的に成立させようとする、どうしても書く技術が必要になってくる。

ア 人や物とのかかわり合いの中から、何を取り上げて書くか、考えてみよう。

- ・心を動かされたことを中心にして作文を書くからこそ、読み手に思いが伝わっていく。強く心を動かされたことを中心にして書けば、主題のはっきりした作文になる。

「過去の経験の中で、強く印象に残っている出来事をよく思い出し、書こうとする内容や材料を考えてみよう。」

イ どんな順序で書いたらよいか、考えてみよう。

- ・どんなことから書き始め、どのように書き進め、どんなことで書き終わらせるか、あらかじめ、全体の組み立てを考えておくことが大切である。

「アで選んだ材料をもとに、組み立てをノートに整理してみよう。」

ウ 文章の書き表し方を工夫してみよう。

- ・心を動かされた出来事を、読み手によく分かるように書き表すためには、様子をくわしく具体的に書くことが大切である。

- 時…年月、日にち、曜日、時間、季節など。
- 所…風景、広さ、距離、位置など。
- 人…表情、動作、服装、言い方、会話など。
- 物…形、色、数量、におい、音、動き、手触りなど。
- 心…思ったこと、感じたこと、考えたことなど。

このような着眼点にそって、様子がくわしく書かれていると、読み手は、その場面をありありと目に浮かべることができる。心に残った出来事を書く場合、ある場面を題材として取り上げて書くわけだから、その時の様子をよく思い出して工夫して書くように指導している。上の表は、「作文名人への一歩」と題して、ノートの表紙に貼り、いつも参考にさせている。

エ イで組み立てた構想をもとに、場面や情景が目に浮かぶように工夫して、実際に書いてみよう。

オ 書いた文章は必ず読み返し、文章を磨き上げよう。

自分の書いた文章は、必ず読み返し、少しでもよい文章に磨き上げることが大切である。推敲は、読み手に内容を正しく伝えるためばかりでなく、自分の考えを確かなものにしていくうえでも大切なことなのである。

推敲の際に注意すること

- ・文章の発端・結末の表現は適切か。
- ・段落のまとまり、段落と段落の関係、全体の組み立ては適切か。
- ・経過の部分は、詳しく書かれているか。
- ・登場人物の動作・表情・態度、気持ちや会話などが適切な言葉で書かれているか。
- ・まわりの様子、物の説明が効果的に書かれているか。
- ・語句の選び方、文の表し方、文と文のつなぎ方は適切か。
- ・題のつけ方は適切か。
- ・常体と敬体の文が混ざっていないか。
- ・漢字・仮名づかい・送り仮名に誤りがないか。
- ・句読点・符号の使い方は適切か。
- ・原稿用紙の使い方は適切か。 など。

③児童作文の教材化と作文の授業・・・資料2、3、4

子どもたちだけでなく、私もまた楽しんで取り組めるのが、クラスの児童の作文を教材化し、それをもとに行った作文の授業である。教科書教材への取り組みよりも真剣に調べ、発表している。学級の実態から、つきたい力をねえそうな教材を見つけ、開発し、発展的に利用できるのが対象児童作品のメリットである。身近な教材への親近感や友達のように作文名人になれるかもしれないという期待感があるためだろう。

(3)環境づくり

①書く意欲を育てる

書く行為を成立させるには、書き手に表現への意欲がなければならない。書くことに意欲を持って取り組ませるために、表現意欲をかきたてるようなしかけが必要である。必要感を感じるか、興味・関心を感じるかのどちらかであろう。作文好きが多い我がクラスは、友達の作文を読むのが楽しいという子が多い。そこには、友達発見、友達理解があるからである。そして、それらが深まったとき、作文はますます楽しいものになるのであろう。

②作文に関する掲示

4月から書きためた作文や俳句、材料メモなどを掲示し、いつでも子どもたちの目にふられるようにしている。自分の作品だけでなく、友達の作品にも目がいくようになり、子どもたちの中から「〇〇の作品いいね」と聞かれるようになった。環境からも、児童の相互理解につながっている。また、「文章を書くときの手順」や「原稿用紙の正しい使い方」を模造紙に書いて掲示し、書くときの参考となるようにしている。

③作文の読み聞かせ

一生懸命書かれた作文や日記は学級通信に載せて紹介している。表現上の工夫や内容的なおもしろさがあり、全体場で扱いたいときには、帰りの会で読み聞かせをし、ポイントとなるところや参考にしてほしいところなどを話している。いつ自分の作品が載るのだろうかと子どもたちは楽しみにしているようである。また、友達の作文の内容が家庭での話題に出ることもたびたびあるようだ。保護者が、自分の子どもの友達を知ることにもつながっていると聞く。

④文集作り・・・資料5

学年末や修学旅行後に文集を作った。子どもたちの手で作ったものなので、すみからすみまで目を通して。自分の書いた作文よりも友達の書いたものを楽しみにしているようである。

また、修学旅行の思い出文集では、日常ふれているものとは違った自然や文化、歴史に出会い、学び、感動したことを忘れてしまう前に、文章で旅の記録を残しておこうということで作った。作文や見学場所ごとのレポート、俳句など子どもたちが載せたいことを選び、子どもたちの手で作成した。書きたいという思いが形となって残ったという喜びがある。

V. まとめと今後の課題・・・資料6

昨年の11月、全校とクラスの保護者を対象に総合的な学習の発表会を行った。4月からクラスの保護者の田んぼを借り、田植え、薬かけ、水の管理、雑草とり、台風対策、稲刈り、脱穀など、観察や体験をするたびに、感想をノートに書き記してきた。10月に入り収穫が近づくと、発表会形式で劇にしたいとの意見が出た。劇といえば台本が必要である。子どもたちは、5人の代表者が中心になって作ることに決めた。今まで記録してきた総合のノートや、「お米とわたし」作文コンクールに応募した友達の作文（資料3、7）をもとに作るようになった。はじめは個人で、次に5人で、さらにクラスで試行錯誤し、私の手元に完成した台本が届いた。場面は体験をもとに順番に構成されているが、至るところに相手をひきつける工夫や表現上の工夫がたくさん見られた。いつのまにこんな力がついていたのだろうと正直驚かされてしまった。実践が実を結んできたと感じた瞬間である。

今後の課題としては、子どもたちが人と人との関係を豊かにし、さらに自己表現力をつけるために、

- ・人（対象）を理解する視点をもたせること
- ・人を題材にして文章表現活動をさせること

この二つの視点を結びつけた実践を展開していきたい。学校生活をふくめた身の回りの出来事、自己の内面の問題も含めて、「人」を題材にして書くことを通して、人間を理解し豊かな人間関係を築くとともに、自己を表現できる力を育てていきたいと考えている。

VI. おわりに

子どもたちに、書くことに意欲的に取り組ませるためには、まず何より、教師自身が作文の指導に意欲的に取り組まなければならないということを実感した。教師が作文嫌いでは、子どもが好きになるはずがない。教師は、子どもの作文の最初の読み手である。子どもの作文には、子どもたち一人一人の自己主張や思いがこめられている。また、普段の生活では気づかない子どものものの見方と出会うのである。子どもの作文の好きな、よき読み手になりたいと心から思う。

参考・引用文献

1. 斉藤 民部 1993 「だれでもできる日記指導」 P194～206
あゆみ出版
2. 三島 幸枝 1997 「作文を書こう」 P46～48、64～69
岩崎書店
3. 田近 洵一 1996 「作文の授業」 P191～192、210～213
国土社
4. 樋口 裕一 2001 「作文力をつける」 P2～3
学研
5. 深浦町立修道小学校研究紀要 1999年、1998年

平成12年4月12日(5分間)

「楽しい」という言葉が連発されていることから、とても楽しかったことが想像できる。しかし、楽しいを表す語彙数が少ない。また、題にも工夫がほしいところである。

[illegible]

四月十二日(水)

M

M

書くことが大好きなMでも、時には気分がのらないこともある。運動会の練習で疲れ気味のところもあるのだろうか。

「6時間の中でも1番疲れたのは、何の時間かな。」と一つのことには視点を置くようなコメントを書いてMに返した。

五月二十四日(水)

2年も継続するとここまで成長するのだ。周りに目が行き届き、いろいろな立場の人を理解しようという気持ちが伝わってくる。また、主題がはっきりした題になっている。

[illegible]

M

資料1-②

平成12年5月9日

(10分間)

Y

自分の気持ちを素直に表現することができる。ほんの1ヶ月であるが毎日続けることで、量的にも質的にも成長した。

文のつながりはまだ不十分である。

思とりくわを生し走りの将の生都ど学し注に今
いけはれてわしにてつでに棋時か活一校ま意に意日
まい授しましたて注る夢丸はせ緒にまされたの
すを見業いとうち友だもにほおだのめつ勉のりたの
なにおまのの達たいにれて胃のきりしり
りくすおん人あでしともしそ多くそり
れだながの勝主先生そにだて将Yとれ選
動いが授間にもし勉強を先Yとれ選
しとり業にまし勉強を先Yとれ選
たうこれもおくたの強先Yとれ選
いとががくたの強先Yとれ選

5月9日曜日

月大色つい背しはしり閑お先しホ色な
け夜色な手かそた番たり先生て番な
キお色でせし。でり生目行な番の
キこ色いすく。担ま生目眼ま番の
キとしいすく。担ま生目眼ま番の
てい。ま生と。年先生をばの多か
い。がした手て。生をばの多か
ま。い。た。手。な。く。見。山。前。想。は。と。想。み。の。け。い。新。内。に。
す。い。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。
。あ。は。に。き。つ。ま。り。も。小。だ。生。当。想。み。の。け。い。新。内。に。

育日主曜日

平成13年4月7日(10分間)

Y

稚拙な文章ではあるが、ウキウキした気持ちが私のところまでガンガン伝わってきた。6年生になった喜びややる気を自分なりの表現で表している。作者の性格や物事に対する考え方がそのまま文章に表れている。

平成14年2月4日(10分間)

Y

書き出しに一番伝えたいことを持ってき、あとでその理由を説明している。過去を振り返り、今に結びつけている時間の動きにもひきつけられる。ニコニコという思いが先にたったのか、一文目の文末だけを常体で書くなど、文末を工夫するようにまで成長した。

にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる
にと思とすとをうこのたしをちくがつてをががテる

ニコニコ

資料2

1. 目標

- ① 主題がはっきりした作文を書いてみようとする意欲を高める。
- ② 友達の作文の優れているところを見つけ、書き込みしたり、発表したりすることができる。

2. 展開

| 学 習 活 動 | 指 導 上 の 留 意 点 | 評 価 |
|---|--|---|
| <p>1. 本時の学習教材とめあての確認をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">Rさんの作文のよいところを見つけよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・全員で読む。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「もうすぐ実りの秋」 (対象児童作文) ・教材文配布 | <ul style="list-style-type: none"> ・声に出して確認しているか。 |
| <p>2. 作者の音読を聞く。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・音読を聞く前に、主題は何か考えながら聞くことを指示する。 | |
| <p>3. 主題を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収穫が近くてうれしい ・みんなで苦労したからこそ収穫が待ち遠しい | <ul style="list-style-type: none"> ・児童から出てこない場合は、題に着目させる。 | |
| <p>4. 作文のよいところを見つける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様子がくわしく書かれている ・気持ちがよく表れている | <ul style="list-style-type: none"> ・教材に線引きさせる。 ・2つの観点に目を向けさせる。 ・机間指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・作文のよいところを意欲的に見つけようとしているか。 |
| <p>5. 見つけたよいところを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気持ち（心中の言葉、会話、声喩など） ・様子（時、所、人、物など） | <ul style="list-style-type: none"> ・場面にそって発表させる。また、根拠となる言葉にも触れさせる。 ・児童による回し発言をさせながら、話し合いをふくらませる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・根拠となる言葉に触れながら発表しているか。 |
| <p>6. 作文から作者の人柄について考え、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優しい人 ・物事を表面だけで見ない人 | <ul style="list-style-type: none"> ・文には、人柄が表れていることを確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・作者の人柄について、自分なりに気づくことができる。 |
| <p>7. 主題がはっきりした作文を書くために必要なことを確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・板書の中の観点に目を向けさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・主題がはっきりした作文を書いてみようとする意欲が高まったか。 |
| <p>8. 作者のまとめの音読をする。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学級の変容と同様、作者の変容もみる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・はじめの音読よりも気持ちをこめて読んでいるか。 |

もうすぐ実りの秋

六年 R

①「五、六本を一束にして植えてください。」
 苗の植え方の説明を田んぼの先生から聞いて、みんないっせいに田んぼに入り、田植えが始まりました。

②五月十七日、今日は総合の勉強で学校の友達の家
 の田んぼを借りて、六年生のもみなで田植えをしに行きました。この田んぼと、田んぼの先生には、これから一年間お世話になります。

③わたしは、どろまみれになりながら苗を植えていきました。田んぼの中では後ろに移動するのも一苦労で、悪戦苦闘しながら苗を植えました。学級で借りている友達の田んぼは、わたしの家の裏にあります。だから、いつでも苗を見に行けます。

④夏休み、友達と田んぼを見に行きました。久しぶりに稲を見て、びっくりしました。みんなで田植えをした時は、十五センチだった苗が、とても大きくなっていました。わたしだけでなく、友達もびっくりしたようで、

「大きくなったね。」

と、目を丸くして話していました。稲には小さな小さな真っ白い花がいっぱいついていました。花は風にふかれて気持ちよさそうにゆれていました。

（今、こんなに大きいんだから、刈り取る時はどうなってるのかなあ。楽しみだなあ。）

と、思いました。

⑤わたしの家のとなりにある田んぼは、台風十五号の影響で、稲がたおれてしまいました。それを見て、（みんなで植えた稲は大丈夫かな。）と心配になりました。

⑥九月十三日、今日は学級みんなで田んぼに稲の様子を見に行きました。わたしはほっとしました。稲が一本もたおれていませんでした。わたしたちは、みんな喜びました。

（みんなで一生懸命植えた稲が、一本もたおれていなくて、本当によかったなあ。）

⑦夏に見たあの小さな白い花は、黄色い実をつけていました。一つの穂に百個くらいの実をつけて重そうに頭をたれています。バツタがピョンピョン足元に飛びはねてきて、わたしと一緒に喜んでいるみたいでした。そして、これからも大きく育つといいなあと思います。

⑧あと一ヶ月すると稲刈りの日をむかえます。今からその日が待ち遠しくてたまりません。みんなで大きなおかまを使って、ご飯を炊く計画を立てています。大好きなご飯をおなかいっぱい食べたいと思います。

もうすぐ実りの秋

六年 辰

児童 H

①「五、六本を一束にして植えてください」

どう説明したかわかる。

苗の植え方の説明を田んぼの先生から聞いて、
みんないつせいに田んぼに入り、田植えが始
まりました。

どのように田んぼに入っていたか
がわかる。

②五月十七日、今日は総合の勉強で学校の友

達の家の田んぼを借りて、六年生のみんなで
田植えをしに行きました。この田んぼと、田
んぼの先生には、これから一年間お世話にな
ります。

どのくらいお世話になるかわか
る。それから田んぼを借りるという気
持ちは伝わってくる。

③わたしは、どろまみれになりながら苗を

植えていきました。田んぼの中では後ろに移
動するのにも一苦労で、悪戦苦闘しながら苗

田植えをしている時の様子が
わかる。

ぼは、わたしの家の裏にあります。だから、
いつでも苗を見に行けます。

④夏休み、友達と田んぼを見に行きました。

田んぼがどこにあるのかわかる。
いつでもながめることができる。ど
うしてそんなに好きなのかわかる。
いつ見に行きたいのかわかる。

久しぶりに稲を見て、びっくりました。み
なさんびっくりにしているように感じる

さうにびっくりにしているように感じる

んなで田植えをした時は、十五センチだった
苗が、とても大きくなっていました。わたし
だけでなく、友達もびっくりましたように、
「大きくなつたね。」

と、目を丸くして話していました。稲には小

さな小さな真つ白い花がいつぱいついていま
した。花は風にふかれて気持ちよさそうにゆ
れていました。

目を丸くするくらいおどろいて
いるんだなと感心します。それから
すくすくびっくりにしているんだが
うちはまだ大きくなつたねと感心
します。大きくなつたねと感心
します。うちはまだ大きくなつた
ねと感心します。

（今、こんなに大きいんだから、刈り取る時
はどうなつてくるのかなあ。楽しみだなあ。
と、思いました。

とても刈る目を考えしみにして
いるようにうきうきしているよう
なのがよくわかります。

⑥わたしの家のとなりにある田んぼは、台風

十五号のえいきょうで、稲がたおれてしま
いました。それを見て、

（みんな植えた稲は大丈夫かな。）

ここからはRさんが稲の様子を
とても心配しているのがよくわか
ります。
そして思ったことは、もともと
不安になったのがわかります。

と心配になりました。

⑥九月十三日、今日は学級みんなで田んぼに

稲の様子を見に行きました。わたしはほと
としました。稲が一本もたおれていません
でした。わたしたちは、みんなで喜びました。

ほととしましたとさういふ、もともと先
みかんとかんじました。Rさんが
Rさんが心の中を心配していた
なまを感じました。
自分だけよさげなのではなく、みんな
でよさげなのかわかる。Rさん
もみんなにもよさげなほいほいと
いう気持ちでした。

（みんなで一生懸命植えた稲が、一本もたおれていなくて、本当によかったなあ。）

とても安心したのがよくわかります。

と思いましたが。それに、夏休みに見た時よりかなり大きくなっています。長さをはかると、七十六センチで、わたしのこしのあたりまでありました。

夏休みに見た時よりかなり大きくなっているのを見て、はなはなと喜んでおりました。七十六センチと長さを測ると、自分のこしのあたりまで達しているのを見て、うれしく思います。

⑦夏に見たあの小さな白い花は、黄色い実をつけていました。一つの穂に百個くらいの実をつけて重そうに頭をたれています。バッタがビョンビョン足元に飛びはねてきて、わたしと一緒に喜んでいてみたいでした。そして、これからも大きく育つといいなあと思いが、田んぼをあとにしました。

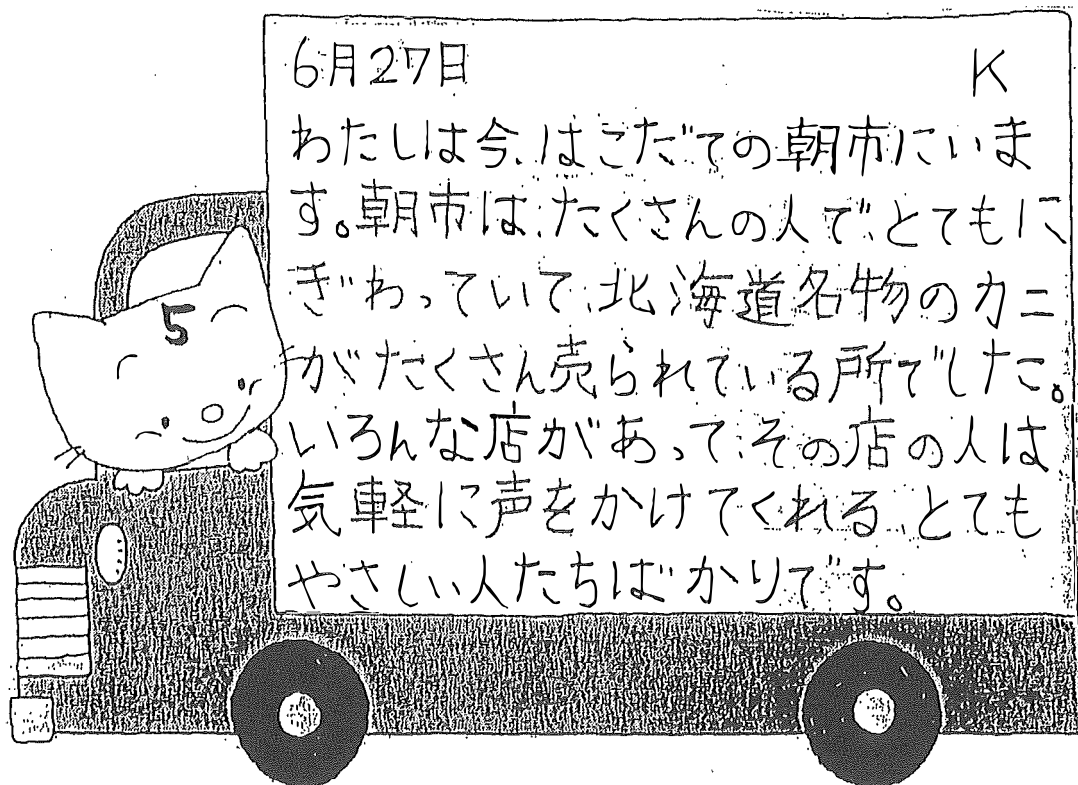
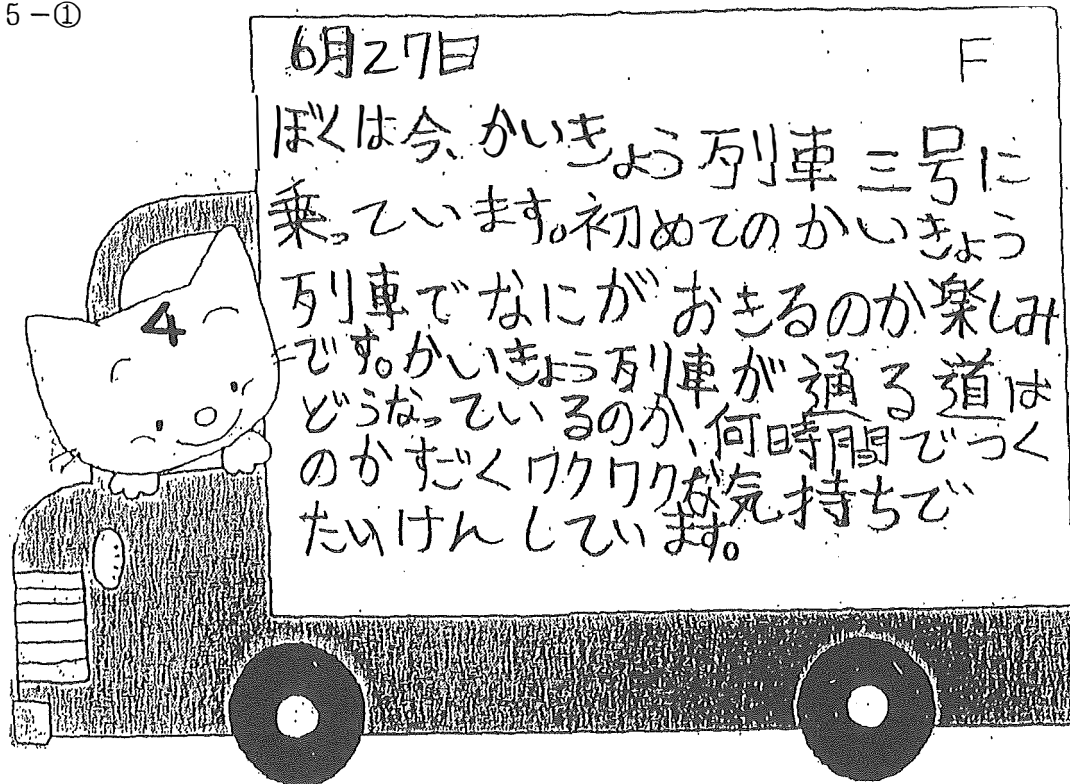
前に出てきた小さな白い花が黄色い実をつけていることがあり、その一つの穂には百個くらいの実がついているのを見て、うれしく思います。バッタもいっしょに喜んでいてみたいというのがかわいいなあとおもっています。

⑧あと一ヶ月すると稲刈りの日をむかえます。今からその日が待ち遠しくてたまりません。みんなで大きなおかまを使って、ご飯を炊く計画を立てています。大好きなご飯をおなかいっぱい食べたいと思います。

「Rさんが、がんばれ」といって、うめたなあと、思っています。

「あと一ヶ月というのを、待ち遠しくてたまりません。みんなで大きなおかまを使って、ご飯を炊く計画を立てています。大好きなご飯をおなかいっぱい食べたいと思います。」

「Rさんが、がんばれ」といって、うめたなあと、思っています。



一人一体験を担当し、旅行のレポートを書いた。体験中もしくは体験直後に記録したので、文末は現在形で書かれている。臨場感があり後で読み返しても、その場面にワープできそうな気さえする。また、字はきれいとは言えないが、その場面を楽しんでいることが伝わってくるものである。

| | | | |
|--|------------|------|---|
| | つゆふきとばす花火が | 夜になり | N |
| | キラキラ | | |

| | | | |
|--|--------|-------|---|
| | 函館一面 | つゆ空の下 | O |
| | ダイヤモンド | | |

| | | | |
|--|-----------|---------|---|
| | ルスツリゾート | 六月の風きこる | K |
| | ゼッキョウマシーン | | |

| | | | |
|--|---------|--------|---|
| | 道南の空 | 打ち上げ花火 | E |
| | パラパラ散てく | | |

季節が変わるたび、また書きたいという思いのままに、何度も作ってきた俳句である。6年生ともなると、普段は使ったことがないが、耳にしたことがある言葉を使ったがる傾向がある。五・七・五の定型にとらわれたり、言葉の使い方を間違えることをおそれたりせず、どんどん作らせている。

「農家の苦勞と收穫の喜び」 台本

服装は、半そで、半ズボンに帽子。首にはタオルを巻いている。

ナレ 今日、五月十七日は、六年生のみんなが楽しみにしていた田植えの日です。さて、みんなは米作りを通してどんなことを学んだのでしょうか。これから見てみましょう。

博士 わたしたちが米作りについて調べたのは、五年生の春からです。社会で、山形県の米作りを勉強してから、自分たちの住んでいる深浦町の米作り、自分たちが毎日食べているお米についてもっと知りたいなあと思ったことがきっかけで、私たちの総合の勉強がスタートしました。

先生が近づいてきたので、誰かの合図でみんなおしゃべりをやめる。

先生 みんな、準備はできましたか。

みんな はい。

先生 では、出発しましょう。

みんな はい。

一 班から順番に歩き始める。一班(子①)(子⑤) 二班(子⑥)(子⑪) みんなルンルン気分で行く。

田んぼを用意する。

歩く人は、お客さんの周りを歩く。

子③ 田植え、初めてだばんで、楽しみだ。

子④ うん。早くやりたい。

子⑪ だばって、中に入ればぬるぬるして、大変らしいよ。

子④⑥ うそう。

子どもは班ごとに並び、先生は前に出る。

Mの母とおばあさん、帽子とタオルを重ねてかぶる。ビニールの上下を着ている。苗を箱に入れて持ってくる。

ナレ さあ、いよいよ田植えが始まります。みんなとってもワクワクしています。

先生 Mさんのお母さんのお話をちゃんと聞いて、上手に植えましょうね。

みんな はい。

子⑥ よろしくお願いします。

みんな よろしくお願いします。

Mの母 これから、みんなと一緒に田んぼの勉強をするMのお母さんです。わたしたちがお手本を見せます。

二人は田んぼの中に入り、手本を見せる。一列の途中まで上手に植える。

おばあ 五本ずつ取って、皆さんも、植えてみてください。どろの中にしっかりと植えないと、あとで浮かんできますからね。
みんな はい。

M 母、おばあさん、先生も植える。一班から順に苗をもらって田んぼに入る。

クイズ ここでクイズです。六年生は何の苗を植えたでしょう。

次のクイズです。津軽ロマンの特長は。

津軽ロマンの特長について説明する。

博士 ようし、がんばるぞ。

子⑦ ああ、どきどきする。

子④ まっすぐ植えられるか。曲がったらどうしよう。

おばあ 植えたら、後ろに下がっていいんだよ。さあ、まだまだあるよ、がんばって。

子④⑥⑨

はい。

しばらくみんな真剣に田植えをする。どろで足がぬかり、動きにくい。かがんで植えているので、みんな腰が痛そう
だ。

子⑧ ふうう。やっと終わったあ。

子⑩ 手作業で田植えをすると腰が疲れるね。今は機械で植えてい

るところがほとんどなんだって。

博士 手作業と機械の田植えの違い、時間など、五年生の時の総合の勉強を振り返って説明する。

子⑪ そうなんだあ。昔の人は大変だったんだ。

子⑦ 今だって大変なんだよ。田植え機いくらすると思う。自動車よりも高いんだって。

子⑤ へえ、なんだ。手作業も機械も大変なんだね。それにしても、疲れた。

子⑥ だけど、苗を植え終わった後ってすごく気分がいいね。

ナレ みんなは、初めての田植えを真剣に行いました。さっきまでは、どろの田んぼでしたが、今はかわいい緑でいっぱいになっています。みんなは田植えの大変さ、苗を植える農家の期待を知りました。

先生 みんな、並んで。

先生 みんな

先生 はい。

では、今日の感想を言ってください。

子⑧ 子⑧は総合のノートを見てその日の感想を発表する。

M 母 ノートを読む。
今日は、みんなが田植えをがんばってくれてうれしかったです。

子⑤

Mさんのお母さん、おばあちゃん、今日は田植えの仕方を教えてくれてありがとうございます。今度来るときもお願いします。

みんな、さようなら、と言って手を振って帰る。

クイズ
博士
突然ですが、ここでクイズです。(歴史クイズ)
昔の米づくりについて説明する。

二の場面

ナレ
そして、今は夏休み。わたしたちの田んぼは関のRさんの家の裏にあるので、夏休み中の観察はRさんが担当することになりました。R、N、Aの関仲良しグループは、学校のプールで楽しみました。そして、帰り道、

A
ちよつと、R、田んぼ、どうなつたら。

R
だいぶ大きくなつたよ。三人で見に行ってみるが。
N
んだ。早く行くべし。

三人はプール道具をもったまま、田んぼに向かう。田んぼの準備。

N
わあ、でつかくなつたら。すげえなあ。

ナレ
田植えの時は、十五センチしかなかった苗が、今はNのヒザ

あたりまでできています。でも、まだ緑色で、稲というよりまだ、苗という感じでした。

A
すげえ。稲刈りの時はどんきぐらいになってるんだろ。楽しみだなあ。

N
ちよつと、これ何。いっぱい白い花咲いでら。

博士
これは、穂をつくるためにできるんだ。この花を稲の花という。二時間ぐらいしか咲かないんだ。

R
すごい、少ししか咲かない花見たんだ。

NA
やったね。

博士
三人は、気づいていませんが、稲の花が咲き、大きくなるまでにはたくさん苦労があつたんだ。草取りや水の管理は毎日の大事な仕事なんだよ。雨の日も暑い日も、毎日お疲れ様だね。

NA R
Mのお母さん、ありがとう。

博士
それともう一つ。葉についてだ。本当は無農薬が一番なのだが、虫がついて稲を食べられてしまつたり、暑さや寒さに負けてしまつたりするので、泣く泣く薬を使っているのさ。
A
ふうん。そうだったんだ。ありがとう、博士さん。

三の場面

普通の服装。班長を先頭に玄関で先生が来るのを待っている。しばらくすると、先生がやってくる。

| | | | |
|--|---|--|---|
| <p>先生 九月十三日、今日は、稲がどのくらい大きくなっているか、観察に行きます。</p> <p>みんな はい。</p> <p>子どもたちは、おしゃべりをしながら、歩いていく。</p> | <p>子⑪ 台風で稲倒れてねえべが。</p> <p>M 台風の後、お父さんだば、大丈夫だって言ってたけどな。</p> <p>子⑥ わっ、あそこの田んぼ、倒れてら。</p> <p>子④ こっちのも、倒れてる。</p> | <p>倒れた田んぼとMの田んぼの用意。</p> <p>みなさん、自分たちの田んぼと他の田んぼを観察してください。それから、どれくらい大きくなったか、正確な数字も残しておくこと。</p> | <p>みんな、稲の長さを測ったり、実の数を数えたりする。</p> <p>子⑦ わあ、わだちの田んぼ、一本も倒れてねえ。</p> <p>子⑩ んだ。すげえ、でっけくなってる。(ものさしを持って測る)</p> <p>子⑧ 七十六センチだ。それに 個も実ついであ。</p> <p>クイズ ここでクイズです。(実の数クイズ)</p> <p>子⑨ よくここまで育ったなあ。</p> |
| <p>子⑦ 実もいっぱいいついてるし。(食べるまね) うん、味はまだ薄いみたいだね。</p> <p>子⑧ ほんた。もっと日に当たらないとだめなんだね。</p> | <p>子⑨ 自然と帰る態勢になる。歩きながら、</p> <p>子⑩ だけど、なんでMの田んぼだけ倒れてないんだ。</p> <p>子② 不思議だねえ。他のはミステリーサークルみたいに倒れてるのに。</p> | <p>子③ 分かった。Mの田んぼって、線路の影になってるし、その中でも私たちの田んぼって小屋と小屋の間にあるから、台風の影響をうけなかったんだよ。</p> <p>子③ そっかあ。Mのお母さん、いい場所を貸してくれたんだ。い</p> <p>子③ いお母さんだね。あつ。(うんちをふむ)</p> <p>子③ あはははは。</p> | <p>みんな 今日、みんなは、Mのお母さんの優しさと、台風などの自然災害を心配する農家の気持ちが高んだか分かったような気がしました。それと、稲の強い生命力もね。</p> <p>ナレ 四の場面</p> <p>服装は、長袖、長ズボン。首にはタオル。手には軍手をはき、カマを持っている。</p> |

| | |
|----------|---|
| ナレ | 今日は九月二十七日。待ちに待った稲刈りの日です。六年生のみんなは、稲が体にささったり、かゆくなったりするのを防ぐために、長袖、長ズボンという服装で、カマを持って田んぼに出かけました。 |
| 子⑤ | どのくらいの米、とれるかな。 |
| 子⑦ | そうそう。初めてだけど、大丈夫かな。 |
| 子⑪ | わは、やったことあるはんで、楽勝だしや。 |
| | みんなは、ワクワクしながら歩く。田んぼの用意。 Mのお母さん、おばあさんは、ひもを持って待っている。 |
| 子⑩ M母 | またまたよろしくお願いします。 今日は、みなさんにここにある稲を全部刈ってもらいます。そのあと、稲をたばにしてからひもで結んでもらいます。さらに、はさかけにも挑戦してもらいたいな。 |
| 子① | わたしにもできるかな。 |
| M母 | じゃあ、お手本見せるから。こうやって一束つかんでから、カマでシュッと引く張るの。もう一回やるよ。 |
| 先生 | 刈るのと結ぶのと分かれてやるよ。後で交代するから。まず、最初に刈りたい人。 |
| | 子どもたちは、わあ稲刈る、わたし結ぶなどと話しながら作業に取りかかる。 |
| クイズ | いよいよ稲刈りの始まりです。この時、稲の長さは何センチだったでしょう。 |
| 子⑤ | すごいなあ。 |
| 子⑨ | ああ、うまく刈れないなあ。Mのお母さんってやっぱり上手だなあ。 |
| 子⑦ | 困ったなあ、これ、うまく結べない。 |
| おばあ | これはね、こうすればほどこけないんだよ。 |
| 子④ | すごい。さすがKちゃんのおばあちゃん。 |
| M母 | そろそろはさかけもやってもらおうかな。 |
| 先生 | 手、あいている人、はさかけやってちょうだい。 |
| 子⑤ 博士 | はさかけてなあに。 |
| | ええと、他の田んぼを見れば分かるんだけど、あんなふうに、木の棒にかけて、刈り取った稲を乾かすことなんだ。 |
| | そして、太陽をいっぱい浴びてもっとおいしくすることなんだよ。 |
| 子⑧ | へえ、そうなんだ、見たことはあるけど、名前を聞いたのは初めて。(他の子もうなずく) |
| | 子⑤⑧⑩は、おばあのところに行き、はさかけをする。 |
| | 他の子どもは作業を続ける。 |
| おばあ | はさかけはね、みんながまとめた稲の束を縦に半分に分けて、それを二つぶん重ねて、木の棒にかけるんだよ。はさかけは、機械ではできない仕事なんだよ。難しいけど、できるかな。 |

おばあ

ナレ

子⑧

手を振りながら、おじぎをして帰る。子⑥はありがとうございましてと叫ぶ。

ナレ

子
⑨

その日の晩ご飯、わたしはいつもよりご飯がおいしく食べられました。

長袖、長ズボンに帽子をかぶっている。場所は田んぼ。離れた場所で大人の人たちが脱穀作業をしている。

十月九日、今日は脱穀の見学に来ています。近くで見学したのですが、穀がとぶので離れた場所からの見学になります。

M
母

子②

子
⑨

クイズ

子③

子⑦

子⑧

K
父

子
⑩

K
父

先生

そろそろ帰るよ。今日は、大仕事だからたくさんの方が一緒にやっていたね。

子⑤

今日は、ありがとうございました。

おばあ
みんな

お米になったら教えるからね。楽しみに待っててね。
はーい。(手を振りながら帰る)

博士

それにしても、米ができるまで長い道のりだったね。思い出
してごらん。

博士

米の一年(八十八の苦労など)、米作りの問題点などについて
説明する。

ナレ

それから二週間後。職員室の電話が鳴る。

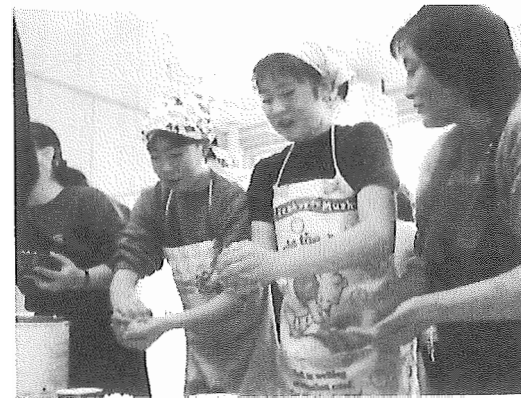
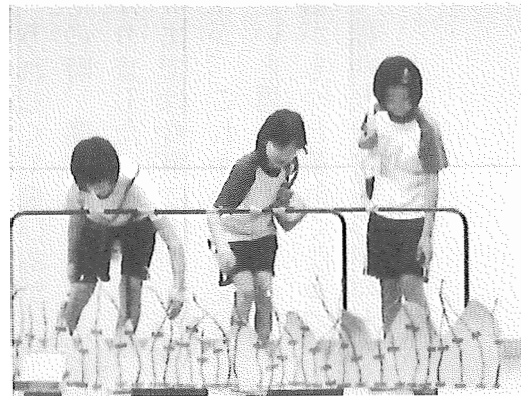
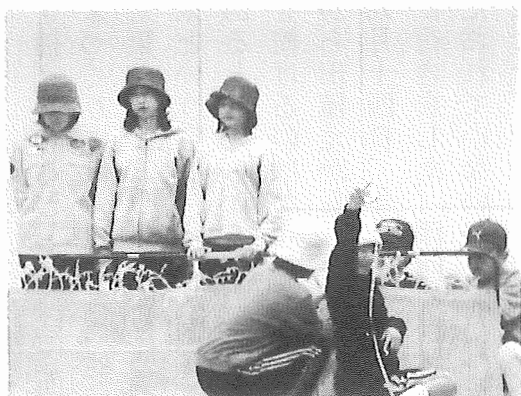
M母

もしもし、Mのお母さんですが、もう、お米になりましたよ。
いつでも、食べられますよ。

先生

ありがとうございます。みんな、お米できたってよ。
わあい。そして今日が待ちに待った収穫祭。

みんな



苦勞のあとの喜び

六年 E

①五月十七日、わたしは、初めて田植えを体験しました。そして、農家の仕事は大変なのだとあらためて実感しました。

②わたしは、明日、田植えをすると聞いて、
(どんなふうに植えるのかなあ。)

と、とてもわくわくして楽しみでした。

③当日、首にタオルをまき、長ぐつをはいて、先生やクラスの友達と一緒に学校を出発しました。田んぼは学校から歩いて五分ほどのところにあります。

「上手に植えられるか心配だね。」

と友達と話しながら歩いていきました。

④田んぼに着くと、田んぼの先生が待っていました。同級生のMさんのお母さんです。植える本数や植え方などを優しく教えてもらったあと、いよいよ田植えに挑戦です。わたしの祖父母も米を作っているけれど、田植えをするのは初めてだったのでドキドキしました。はだしでおそろおそろ入ってみると、どろがひんやり冷たくて気持ちよかったです。

⑤そして、ゆっくりとこしをかがめて苗を植えていきました。ところが、まっすぐに植えているつもりが曲がってしまい、なかなかうまくいきません。テレビや教科書で、手作業での田植えは見たことがあったので、簡単だと思っていました。けれど、まっすぐに植えることはとてもむずかしいことでした。全員が

苗を植え終わると、田んぼ一面緑のジュータンのようでした。
⑥米づくりには、田植えの他にも、雑草とり、水の管理、台風対策など、手間のかかる仕事はまだたくさんあります。
⑦米という字は、八十八と書き、米づくりには八十八の作業があると例えられています。それほど苦勞をしても、農業を続けるのはなぜだろうと、わたしはとても不思議に思いつながら田植えからもどりました。

⑧九月十四日、今日は四ヶ月前にみんなで植えた苗の様子を見に行きました。深浦に台風が接近したあとだったので、稲がたおれていないか心配だったけれど、田んぼに着いて安心しました。十センチほどしかなかった苗が八倍もの長さに育っていて、穂も重たそうにたれさがっていました。わたしは、「すごい。わたしが植えたのにも、ちゃんと実がついてる。」と、うれしくて飛びあがってしまいました。

⑨その時、農家の人が苦勞をしても仕事を続けられるわけが分かりました。苦勞をした分、収穫の喜びが大きいのです。

⑩今までは食事に出されていたご飯を少し残したりしていましたが、これからは祖父母に感謝しながら一つぶも残さず食べたいと思います。

⑪穂がもっと黄色くなって、頭を重そうにたれたころ、みんなで稲刈りをするのが今からとても楽しみです。